

13	学校名 武蔵村山市立第八小学校	26～29
----	-----------------	-------

平成29年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

日本人としての誇りをもって、国際社会で生き抜く実践力を育むため、道徳の時間を「徳育科」として再編し、道徳の時間の指導内容に加えて、礼儀作法の実践的指導及び教材作成、評価の在り方についての研究開発を行う。

2 研究の概要

全教育活動を通じて実施する道徳教育の一層の充実を図るため、全学年において、道徳の時間を、（1）道徳の時間の指導に関する内容 （2）礼儀作法の実践的指導に関する内容 に再編する。従来の道徳の時間で指導している内容に加えて、日本の文化や習慣の中で長きにわたり定着してきた礼儀作法について、実践的な指導を行う。

具体的には、①礼儀作法に関する系統的な指導計画と教材の開発 ②我が国の先人の生き方から自らの生き方を考えさせるための読み物教材の作成 ③全時間におけるねらいに即した評価の在り方の検討 ④問題解決的な学習や体験的な学習を取り入れた指導方法の工夫 等について研究開発を行う。その過程において、児童の具体的な変容について、児童自身、保護者、地域の方々による意識調査、行動記録等に基づいて検証し、将来の道徳教育の在り方について、本校としての提言を行う。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

- ① 全教育活動を通じて実施する道徳教育の一層の充実を図る中で、当該小学校の全学年において、道徳の時間を「徳育科」として再編する。これより従来の道徳の時間で指導する内容に加えて、日本の文化や習慣の中で長きにわたり定着してきた礼儀作法について、実践的な指導を行う。
- ② これからの計画的な指導と確実な評価を通して、道徳的心情、判断力、実践意欲と態度等の一層の定着に加え、児童が将来にわたり、日本人としての誇りをもって様々な人と礼儀正しく関わりながら、国際社会で生き抜く実践力を身に付けさせることができる考える。

（2）教育課程の特例

- ① 全学年において、道徳の時間を「徳育科」として再編し、各学年で、年間45単位時間実施する。
- ② 「徳育科」の内容については、「ア 道徳の時間の指導に関する内容」「イ 礼儀作法の実践的指導に関する内容（礼法の時間）」とする。
- ③ 「徳育科」では、全学年において、上記アについては30単位時間程度を、イについては15時間程度を充てる。
- ④ 「徳育科」の指導を通して、「知識・理解・技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」等、評価の観点及び評価の視点の設定の在り方や、指導と評価の一体化についての研究を推進する。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

日本人としての誇りをもって国際社会で生き抜く実践力を育むため、道徳の時間を「徳育科」として再編し、道徳の時間の指導内容に加えて、礼儀作法の実践的指導、教材作成及び評価の在り方についての研究開発を行う。

【礼儀作法の実践的指導内容 10 項目】

- ① 気持ちのよい挨拶と基本姿勢
- ② 心と身なりと物を整える態度
- ③ 先人の生き方に学ぶ姿勢
- ④ 時と場や目的に応じた言葉遣いや態度
- ⑤ いじめを絶対に許さない態度
- ⑥ 温かい人間関係をつくる姿勢
- ⑦ 規則の尊重と公共の場の使い方
- ⑧ 公共の場での心配り
- ⑨ よりよい家庭生活をつくる態度
- ⑩ よりよい学校生活をつくる態度

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「徳育科（仮称）」の全体指導計画（案）の作成 ○ 教員の共通理解及び共通実践のための基礎資料作成 ○ 同学年別年間指導計画（案）の作成 ○ 評価の観点・評価計画の検討 ○ 「（2）礼儀作法の実践的指導」に関する授業研究の試行実施 ○ 「（2）礼儀作法の実践的指導」に関する学習評価の試行実施 ○ 「（2）礼儀作法の実践的指導」に関する指導内容の内容検討 ○ 「（2）礼儀作法の実践的指導」に関する指導資料の作成・活用
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各学年における「徳育科」の設置、学年別年間指導計画に基づいた指導の実施 ○ 公開授業研究の実施 ○ 同学年別年間指導計画（案）の修正 ○ 「（2）礼儀作法の実践的指導」に関する指導及び評価の推進 ○ 「（1）道徳の時間の指導」に関する学習評価の試行実施 ○ 「（1）道徳の時間の指導」に関する読み物教材の内容検討 ○ 研究紀要（中間報告）の作成及び中間報告会の実施
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「徳育科」の学年別指導計画及び評価計画に基づいた指導及び評価の推進 ○ 公開授業研究の継続実施 ○ 同学年別年間指導計画及び評価計画（案）の修正 ○ 「（1）道徳の時間の指導」に関する読み物教材の作成・活用 ○ 研究紀要（第3年次報告）の作成

第4年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「徳育科」の学年別指導計画及び評価計画に基づいた指導及び評価の推進 ○ 公開授業研究の継続実施 ○ 同学年別年間指導計画及び評価計画の公表 ○ 「(1) 道徳の時間の指導」に関する読み物教材の作成・活用・公表 ○ 研究開発報告書の作成及び最終報告会の実施、同内容についてのホームページ等での公開
-------------	---

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6月 保護者、地域の方々への「徳育科(仮称)」設置に関する周知、意見聴取 ○ 6月・1月 児童の実態等把握のための調査実施(全学年) ○ 7月 「徳育科(仮称)」の全体計画等についての学校運営協議会における協議、意見聴取 ○ 2月 「(2) 礼儀作法の実践的指導」に関する学習評価の試行実施に基づく成果検証 ○ 2月 保護者アンケート、学校自己評価、学校関係者評価等による研究第1年次における成果等検証
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 9月 児童の変容把握のための調査実施(全学年) ○ 10月 「(2) 礼儀作法の実践的指導」に関する学習評価の結果に基づく成果検証 ○ 11月 「(1) 道徳の時間の指導」に関する学習評価の試行実施に基づく成果検証 ○ 2月 中間報告会における全国参加者からの意見聴取 ○ 2月 保護者アンケート、学校自己評価、学校関係者評価等による研究第2年次における成果等検証
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 9月 児童の変容把握のための調査実施(全学年) ○ 2月 「徳育科」全体における学習評価の結果に基づく成果検証 ○ 2月 保護者アンケート、学校自己評価、学校関係者評価等による研究第3年次における成果等検証
第4年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 9月 児童の変容把握のための調査における最終成果検証(全学年) ○ 10月 「徳育科」全体における4年間の学習評価の結果に基づく成果検証 ○ 1月 保護者アンケート、学校自己評価、学校関係者評価等による研究最終年次における成果等検証 ○ 2月 研究開発報告会における全国参加者からの意見聴取による研究最終年次における成果検証

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

【道徳教育についての意識調査】

《対象》児童、教員、保護者

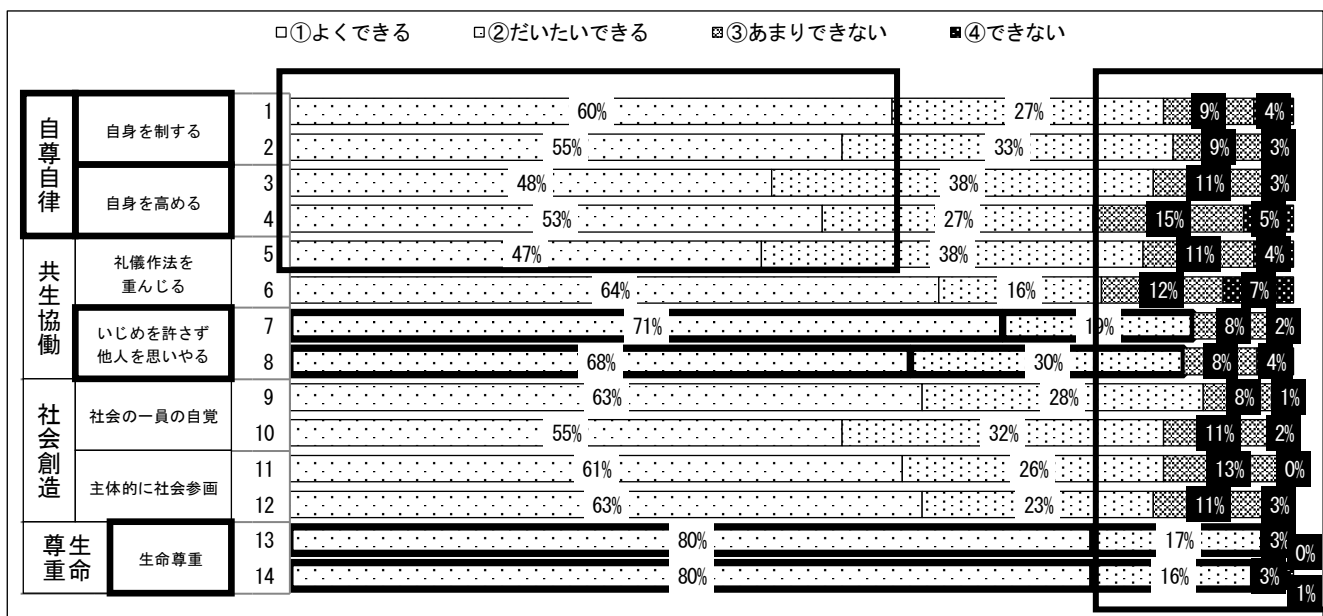
《調査項目》

自尊自律：1. 挨拶	2. 整理整頓	3. 自分のよさ	4. 努力
共生協働：5. 敬語	6. 礼儀	7. いじめを許さない	8. 温かい人間関係
社会創造：9. ルール	10. マナー	11. 家庭生活	12. 学校生活
生命尊重：13. 生命尊重	14. 自然愛護		

① 児童への効果

意識調査結果（平成29年9月実施、課題分析） 調査人数 715名

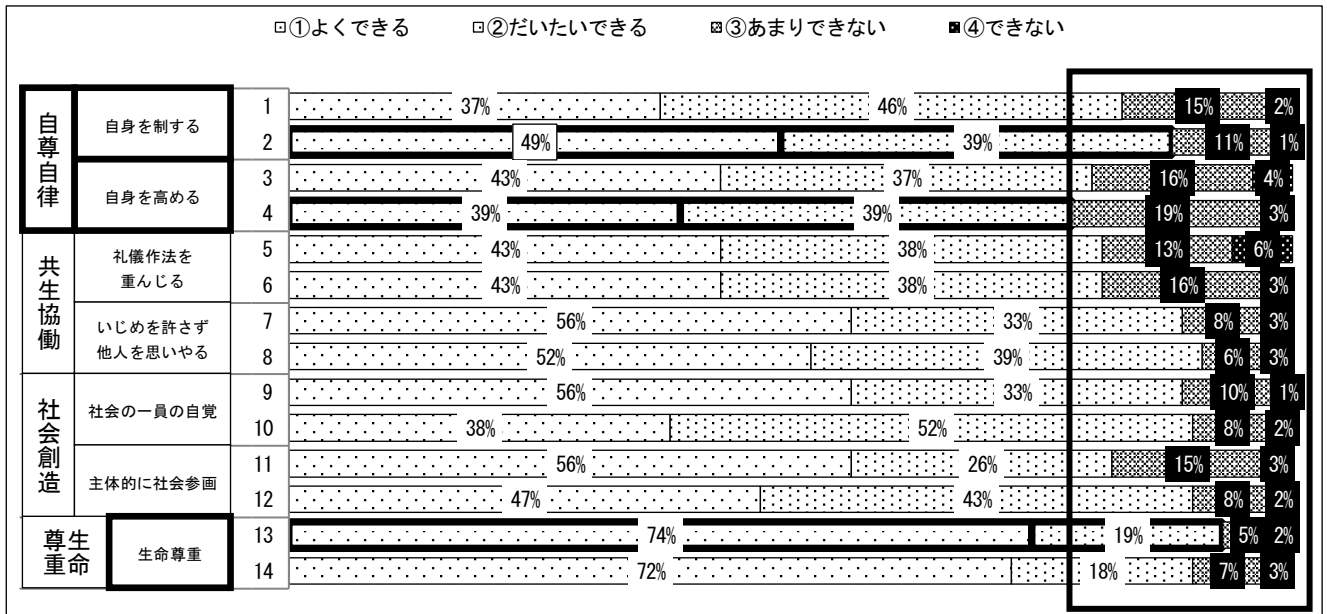
【第1学年】



《効果・成果》 ◇いずれの項目も、「よくできる」「だいたいできる」（以下、「よくできる」「だいたいできる」を合わせて「肯定的回答」と表す。）と答えた児童を合わせた割合が90%前後と、高い数値を示している。◇視点「生命尊重」…「13. 生命尊重」「14. 自然愛護」⇒児童の「肯定的回答」の割合が100%に近い。このことから、命の大切さについては幼い頃から教えられてきていて、生命尊重の基盤となっていると解釈する。◇視点「共生協働」…「7. いじめを許さない」「8. 温かい人間関係」⇒視点「生命尊重」の次に高い数値を示している。この高い意識が、人権を尊重する基本となっていく。

《課題・要指導》◆全体の傾向⇒毎年、低学年（特に第1学年）の意識調査は、中・高学年に比べ、どの項目も比較的肯定的回答を示す数値が高く、実態と自己評価に大きな差が見られる。また、保護者や教員から見た第1学年の実態と比較しても各項目の数値が高い。これは、発達段階として自分を客観視する力が未熟で、過大な自己評価をしがちであると考えられる。◆視点「自尊自律」…「1. 挨拶」「2. 整理整頓」「3. 自分のよさ」「4. 努力」⇒「よくできる」と答えた児童が50%前後であることから、視点「自尊自律」の内容を重点的に指導していく必要がある。

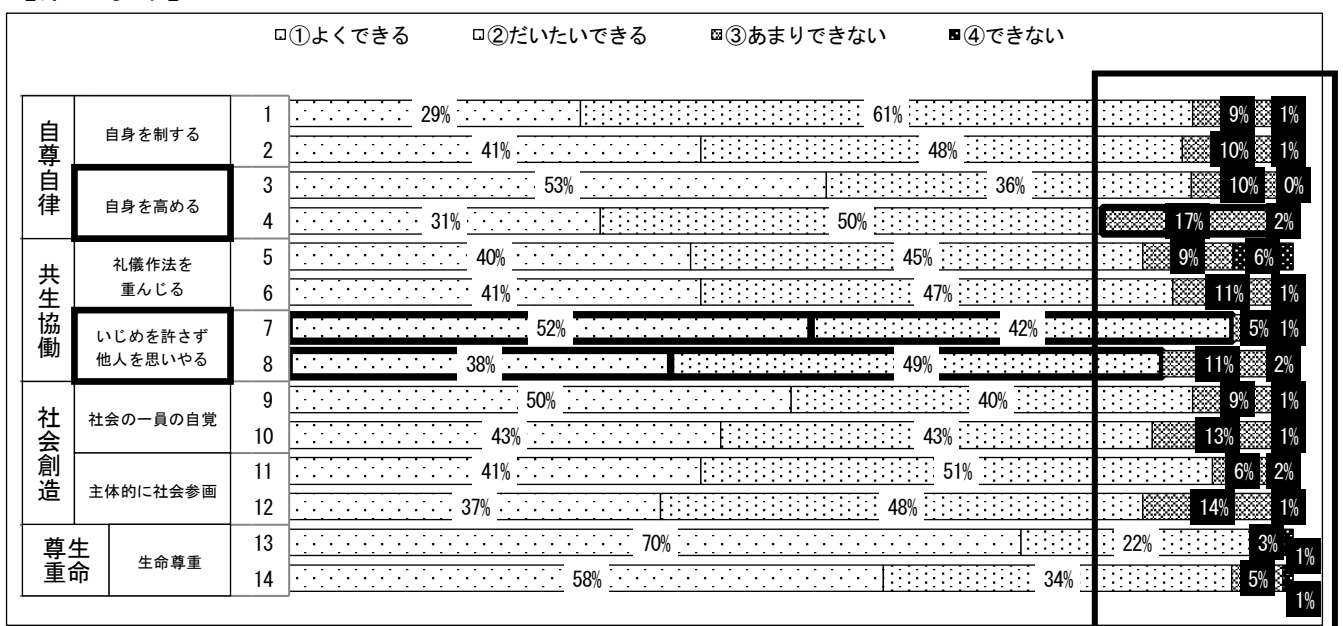
【第2学年】



《効果・成果》 ◇全体的に高い意識を保っている。特に、「13. 生命の尊重」において肯定的回答の割合が、93%と最も高い。徳育科の「生命尊重（ハムスターの赤ちゃん）」と生活科の単元「めざせ生きものはかせ」との学習時期を合わせ、生命・生き物で関連させたことによる結果と見る。 ◇「2. 整理整頓」⇒肯定的回答の割合が高い（今年度＝昨年度87%＋1P）。本研究における低学年の目指す児童像「自尊自律」を重点化した指導の成果があった。（P＝ポイント）

《課題・要指導》 ◆昨年度と比較すると、どの項目も若干低くなっている。特に、「4. 努力」の項目が、昨年度と比べて肯定的回答の割合が低くなっている（今年度＝昨年度92%－14P）。これは、児童自身の自分はこうでありたいという願いが高くなる一方で、学習に難しさを感じ、諦めることも多くなってきたのではないかと考える。引き続き、徳育科の「自尊自律」の視点を中心に、目標に向かって努力を続けることよさを実感させる指導の工夫をしていく。

【第3学年】

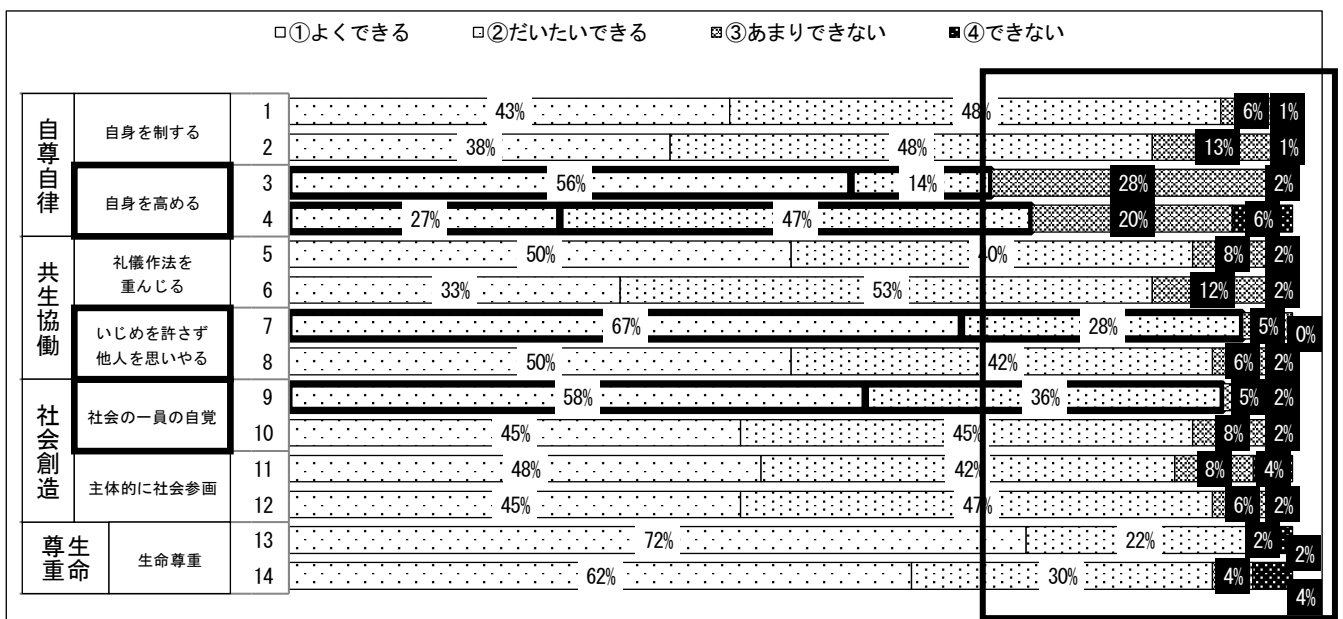


《効果・成果》 ◇低学年と比べて、肯定的回答の割合はどの項目も概ね90%と高い意識を表している。 ◇「7. いじめを許さない」⇒昨年度と比べて、肯定的回答の割合が高い（今年度＝昨年度85%＋5P）。本研究における中学年の目指す児童像「共生協働」の視点を重点化した指導の成果があった。

《課題・要指導》 ◆「8. 温かい人間関係」⇒昨年度と比べて、肯定的回答の割合が低くなっている。これは、友達との関わりを大切にし、良好な人間関係を形成しようとしている反面、「相手の立場になって考える」ことが難しいと思い始めていると捉える。

「共生協働」の視点を重点化した指導を継続していく。 ◆「4. 努力」⇒「あまりできない」「できない」と答えた児童の割合が19%と高い。これは、昨年度と比べても否定的に答えた児童の割合が高い（今年度＝昨年度14%＋4P）。学校生活全体を通して具体的な目標を立てて努力することによる成果を実感できるようにすることが、今後の課題である。

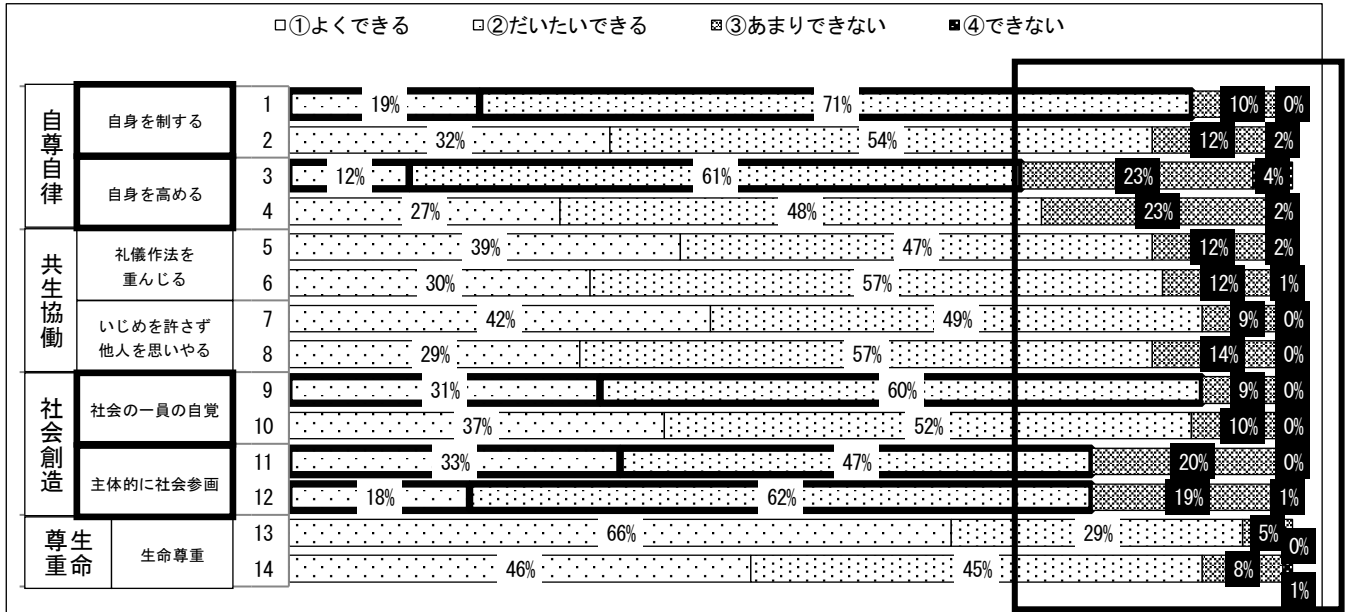
【第4学年】



《効果・成果》 ◇この学年は、第1学年から徳育科を学習してきた児童である。ほとんどの項目で、肯定的回答の割合が90%を超えている。 ◇「7. いじめを許さない」「9. ルール」⇒「いじめを許さない」は、95%の児童が肯定的に答えている（今年度＝昨年度91%＋4P）。「ルール」は、肯定的回答の割合が高い（今年度＝昨年度88%＋6P）。中学年で重点指導をしている「共生協働」に関する項目は、昨年度同様に高い数値であり、徳育科の授業の成果が現れている。相手や集団を尊重する意識が高まる時期であり、高学年に向けて継続して指導していく必要がある。

《課題・要指導》 ◆「3. 自分のよさ」「4. 努力」⇒視点「自尊自律」の項目で、肯定的回答の割合が、他の項目と比べて低い。特に、「3. 自分のよさ」が昨年度と比べても低くなっている（今年度＝昨年度91%－21P）。その中でも、「よくできる」と答えた児童は昨年度より増えた（今年度＝昨年度51%＋5P）。これは、学習に難しさを感じ自信をなくしたり、あるいは分かったときの達成感がより高くなったりしていることの現れと捉える。徳育科での学びが他教科・領域でも感じ取れるよう、指導内容を関連付ける工夫が必要である。

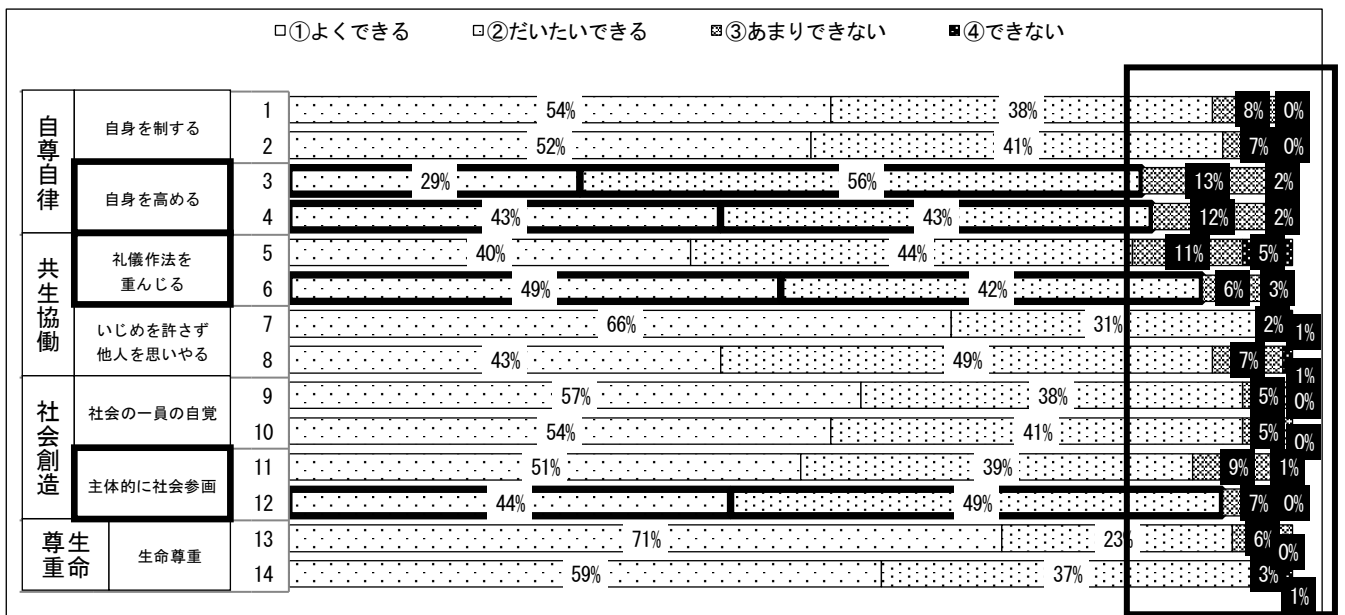
【第5学年】



《効果・成果》 ◇ほとんどの項目で、昨年度と比べて肯定的回答の割合が高くなった。
 ◇「1. 挨拶」「4. 努力」⇒自尊自律の項目で、昨年度と比べて肯定的回答の割合が高い（挨拶…今年度＝昨年度80%＋10P 努力…今年度＝昨年度66%＋9P）。
 その中で、「よくできる」と答えた割合が「だいたいできる」と答えた割合に比べて低くなった。自分を振り返る眼が、より客観的になったことの現れと考える。 ◇「9. ルール」⇒昨年度より肯定的回答の割合が高い（今年度＝昨年度85%＋6P）。本研究における高学年の目指す児童像「社会創造」を重点化した指導の成果があった。

《課題・要指導》 ◆「3. 自分のよさ」⇒自尊自律の項目で、肯定的回答の割合が低い（今年度＝昨年度81%－6P）。他者と関わる中で、自分の短所を感じる場面が増えている結果とも考えられる。学校生活の中に自己肯定感が高められる活動を洗い出していく。 ◆「11. 家庭生活」「12. 学校生活」⇒昨年度と比べて、肯定的回答の割合が低い（家庭生活…今年度＝昨年度85%－5P 学校生活…今年度＝昨年度88%－8P）。「主体的に社会に参画する態度」を重点化し、学校での役割を6年生から引き継ぐなどの機会を捉え、身に付けさせていく。

【第6学年】



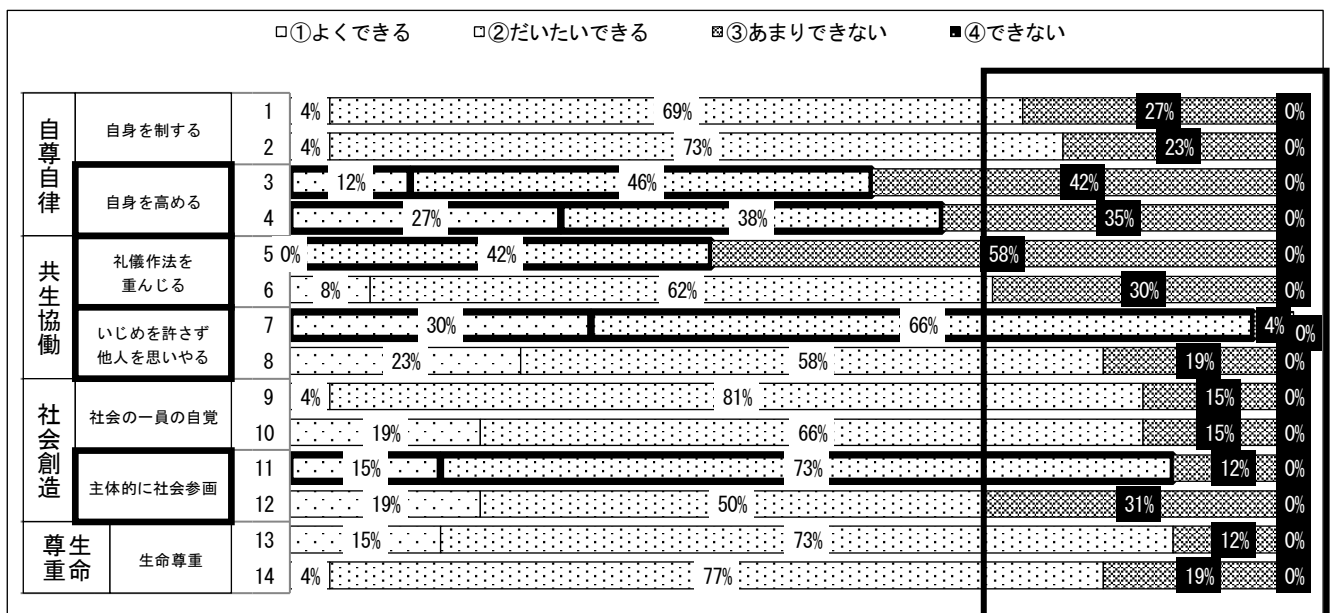
《効果・成果》 ◇全ての項目で、肯定的回答の割合が90%前後である。 ◇「6. 礼儀」「10. マナー」「12. 学校生活」⇒集団生活に関わる3項目で、昨年度と比べて肯定的回答の割合が高い（礼儀…今年度＝昨年度88%＋3P マナー…今年度＝昨年度87%＋8P 学校生活…今年度＝昨年度89%＋6P）。学校行事等で、最高学年として取り組む場が増えたことも要因の一つと考える。学校生活の中では、6年生としてどのように振る舞えばよいのかを考え、具体的に取り組んでいる姿が見られる。

《課題・要指導》 ◆「3. 自分のよさ」「4. 努力」⇒自尊自律の項目で、肯定的回答の割合が全ての項目と比べて比較的低い。自分自身を客観的に見て、自己評価が厳しいとも考えられる。一方、「3. 自分のよさ」「4. 努力」は、肯定的に答えた児童の割合は高くなった（自分のよさ…今年度＝昨年度83%＋2P 努力…今年度＝昨年度77%＋9P）。自分を肯定的に認めたいという気持ちは高くなっていると捉える。学校生活全体の中で、児童が互いに認め合ったり、教員を含む周囲の大人が児童一人一人の思いを受け入れたりする場を多く捉えることが必要である。

② 教員への効果

意識調査結果（平成29年9月実施、課題分析）

調査人数 26名

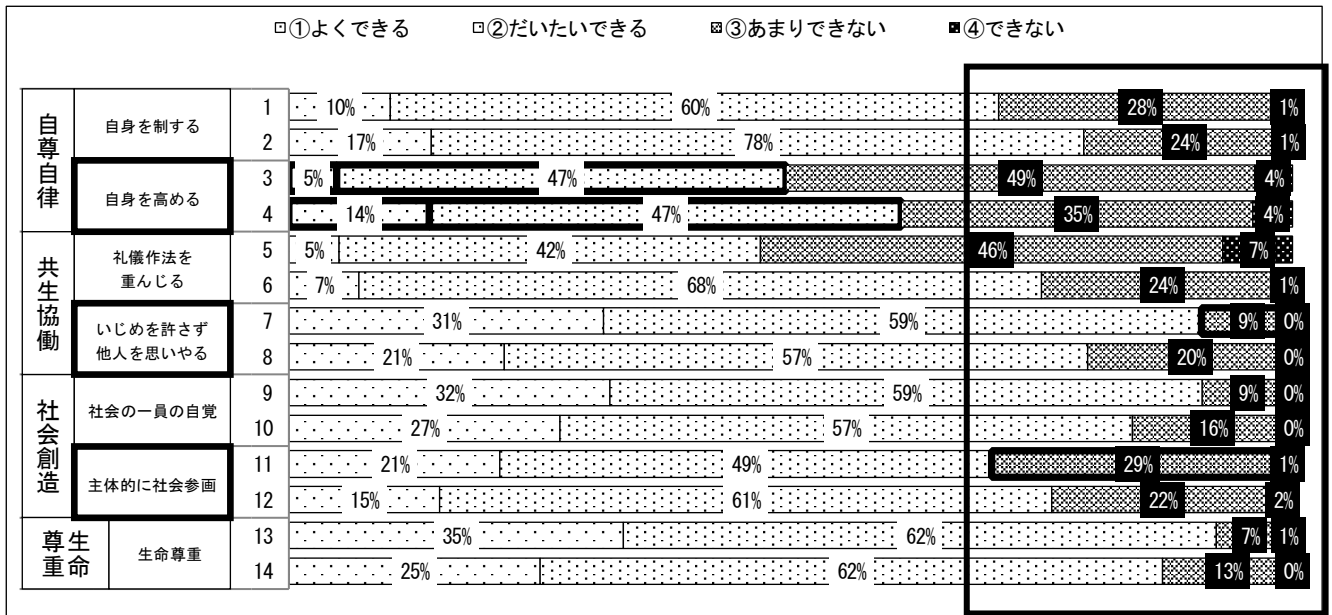


《効果・成果》 ◇客観的な児童の実態を見て、全体の70%が「よくできる」「だいたいできる」と判断している。どの項目も昨年度より数ポイント高くなった。著しく変容したのが「いじめを絶対に許さない」意識が、96%と高くなり、指導の成果が現れていると捉える。

《課題・要改善》 ◆昨年度までの課題が、4視点「自身を高めること」の「3. 自分のよさ」「4. 努力」の項目であったが、今年度も低い数値に留まっている。これは、児童と保護者も同様の認識である。同じ傾向を表しているのが「12. 学校生活」の項目である。これからの社会を生きていく資質・能力として、自分の特徴に気付き、短所は改め、長所を伸ばし、主体的に学級・学校・地域社会に働きかけることの指導を意図的に進めなければならない。 ◆「5. 敬語」の使い方は難しい。尊敬語、謙譲語と日本語ならではの難しさがある。相手を尊重する言葉が敬語であり、使わなければ身に付かないのが敬語である。国語科での指導計画を精査するとともに、礼儀の振舞や相手を思いやる気持ちの表現として、敬語を日常生活の中で意図的に指導していく必要がある。

③ 保護者等への効果

意識調査結果（平成29年9月実施、課題分析） 回答人数 165名



《効果・成果》 ◇保護者として子供に期待するところが顕著に現れている。教員より見る目が全体的に厳しい。特に、「3. 自分のよさ」や「4. 努力」の項目は、保護者の期待が大きい。また、「11. 家庭生活」の項目で、児童の9割は「家族に感謝し、自分にできることは何かを考え、すすんで役に立つことができている。」と思っている。

《課題・要改善》 ◆3割の保護者は家族の一員としての自覚をもっと求めている。徳育科はもとより、全教育活動を通してそれぞれの目標や学習内容を徳育科と関連させていく必要がある。 ◆「9. いじめを許さない」の項目では、1割の保護者が何らかの不安を抱えていることが分かる。この1割を重く受け止め、学校・家庭・地域社会全体で、「いじめは悪だ」という意識をさらに強め、児童や家庭の不安に対して、より真摯に向き合っていかなければならない。

《意識調査の自由記述より一部抜粋、またはその要旨》

- 学校公開中に、すすんで挨拶をしてくれた子がいました。とても気持ちがよく、自分の子へもその話をしました。挨拶は心と心を通じ合う大切なことだと親としても伝えていきたいと思います。知っている子からも知らない子からも挨拶してくれます。
- 人や動物を大切に、相手の立場になって考えることができていると思います。
- 親が手本となりマナーや思いやり、感謝の気持ちなど伝えていきたいと思います。
- すぐに「できない」「分からない」と投げ出してしまうので、あきらめない気持ちをもってもらいたいです。

(2) 運営指導委員会

① 組織

氏名	所属	職名	備考（専門分野等）
貝塚 茂樹	武蔵野大学	教授	教育課程 教育学 道徳
柳沼 良太	岐阜大学大学院	准教授	道徳 プラグマティズム
岩下 宣子	現代礼法研究所	代表	礼儀作法 マナー
栗原 和子	装道礼法きもの学院 三多摩認可連盟	元支部長	装道 着付け 地域住民

有馬 光彦	第八小学校学校運営協議会	会長	有識者 地域住民
佐藤 敏数	武蔵村山市教育委員会	学校教育担当部長	教育行政 社会
勝山 朗	武蔵村山市教育委員会	指導・教育センター 担当課長	教育行政 体育
牧 一彦	武蔵村山市立第八小学校	校長	算数 道徳
柴田 忠幸	武蔵村山市立第八小学校	副校長	算数
嶺井 勇哉	武蔵村山市立第八小学校	主幹教諭	研究主任 理科
小山 直之	武蔵村山市立第八小学校	主任教諭	研究副主任 道徳

② 第三者からの効果

- 年3回運営指導委員会を行い、研究の進捗状況を伝えた上で、運営指導委員会に所属する方々から専門分野の視点で意見をいただいた。研究はもとより、日頃の教育活動に渡り、広く活用することができた。
- 運営指導委員会を重ねるごとに、第三者である運営指導委員会の方々の研究への理解が深まってきた。と同時に、家庭生活で生きるための研究の方向性が具体的に定まった。

(3) 実施上の問題点と今後の課題

① 「徳育科」の指導方法に関すること

- 「徳育科」の指導方法として、①問題解決的な学習 ②道徳的習慣・行為に関する指導 ③体験的な学習 ④動作化 ⑤役割演技 ⑥コミュニケーションに関わる具体的な動作や所作の在り方に関する学習 等、多様な指導方法について今後も更に検討していく必要がある。
- 「徳育科」の授業づくりのポイントとして、特に、①教師の発問の厳選（児童に問いをもたせる発問やねらいに即した発問等） ②話し合い活動の工夫（話し合いの焦点化、発達段階に即した場の設定等） を中心に更に研究していく必要がある。

② 「徳育科」の評価に関すること

- 「徳育科」の評価は、学力の三要素に照らし合わせて、1単位時間の授業を通して、児童の変容や思考の深まり等を「知識・理解・技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」の3観点で評価していくことが可能である。そのために、具体的に評価の12視点を基にした所見の書き方も含めた評価の在り方、評価方法について更に検討していく必要がある。
- 日常の評価（総合所見等）との関わりや行動の記録（通知表や指導要録等）との関連をどのように明確にしていくか今後、更に検討していく必要がある。

③ 「徳育科」と実生活との関連に関すること

- 「徳育科」の授業展開として、「展開1（教材を中心に考える）」と「展開2（生き方や実践につなげる）」を設定したことで、他教科や日常生活等との関連がより明確になり、道徳的実践につなげる上で効果的であった。今後も「徳育科で学習したこと」を、どのように実生活につなげ、道徳的実践ができるようになるか」という視点で全教育活動との関連を明確にしていく必要がある。
- より実践に結び付けるためのカリキュラムマネジメントを図る必要がある。特に徳育科で培った道徳的実践意欲を具体的な実践と結びつけられるよう、まずは特別活動の年間計画の再構築を進めていく。

武蔵村山市立第八小学校 教育課程表（平成29年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	特別活動	総合 学習的 のな 時間	新設 教科	総 授業 時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画 工作	家庭 育	体						
第1学年	306	/	136	/	102	68	68	/	102	0 (-34)	/	34	/	45 (+45)	861 (+11)
第2学年	315	/	175	/	105	70	70	/	105	0 (-35)	/	35	/	45 (+45)	920 (+10)
第3学年	245	70	175	90	/	60	60	/	105	0 (-35)	/	35	70	45 (+45)	955 (+10)
第4学年	245	90	175	105	/	60	60	/	105	0 (-35)	/	35	70	45 (+45)	990 (+10)
第5学年	175	100	175	105	/	50	50	60	90	0 (-35)	35	35	70	45 (+45)	990 (+10)
第6学年	175	105	175	105	/	50	50	55	90	0 (-35)	35	35	70	45 (+45)	990 (+10)
計	1461	365	1011	405	207	358	358	115	597	0 (-209)	70	70	280	209 (+270)	5706 (+61)

学校等の概要

1 学校名、校長名

学校名：武蔵村山市立第八小学校

校長名：牧 一彦

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地：〒208-0021 武蔵村山市三ツ藤 2-50-1

電話：042-560-7151 FAX：042-560-1386

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
116	4	120	4	137	4	126	4	113	3	125	4	737	23

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数

(高等学校の場合)

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	〇〇科										
	××科										
	計										
定時制	△△科										
計											

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	3	0	33	0	1	0	0	5
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	2	1	49						